

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 12 月 9 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23500885

研究課題名(和文) 日本に暮らすアフリカ人の健康問題と生活の諸相との関連についての研究

研究課題名(英文) Lifestyle and Health of African immigrants in Japan

研究代表者

若林 チヒロ (WAKABAYASHI, CHIHIRO)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：40315718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：来日アフリカ人は、1980年代に増加し始め、職場や地域を日本人と共にするようになった。本研究は、統計資料や調査、フィールドワークから、これら日本に暮らすアフリカ人移民の生活を健康という切り口で描こうとしたものである。彼らの健康は、身体的、精神的側面だけでなく、日本人や同国人との人間関係や労働、経済、宗教活動、地域生活や家庭生活など社会的側面を考慮して理解する必要がある。困難や問題、日本人のアフリカに対する偏見といった生活問題への着眼とともに、日本を生き抜く彼らの生活力に視点をあてることで、日本人や日本社会がアフリカから学ぶべき示唆が得られると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The immigrants from Africa to Japan have increased since the 1980s. In particular, the number of the people from West Africa (Nigeria, Ghana, Cameroon, Senegal etc.) has increased. They have worked with the Japanese and lived in the Japanese community. Now many of them married the Japanese women and had children. In this study, I summarized their life events with the research and the statistical data. These are important experiences for the Japanese society.

研究分野：生活科学、健康社会学

キーワード：日本 生活 移民 アフリカ 外国人 健康

1. 研究開始当初の背景

1980年前後以降、日本で生活する外国籍者の多様化がすすみ、全国各地で日本人と外国人とが地域生活を共にするようになった。来日人口規模の大きなアジア系外国人や南米日系人だけでなく、アフリカ地域の人々も、このニューカマーと呼ばれる外国人が増加し始めたかなり初期から来日し始めていた。彼らは、先に来日していた友人や家族から情報を得て、日本語学校に通ったり働いたりして日本に居住するようになっていった。

当時アジアやアフリカから来日した人々は、賃金不払いや労働災害など労働トラブルの被害者として語られたり、母国への仕送り目的の来日であるといった否定的な脈絡で語られたりすることが多かった。しかし、アフリカ人には、近隣や職場の日本人とうまくコミュニケーションをとって人間関係を築いたり、日本での生活を楽しんでいたりする人も多く、日本人と結婚して家庭を営む人も多かった。このような側面にも視点をあてなければ、彼らの生活の全容を理解することは難しく、多角的な視点からの調査研究が必要と考えられた。

同時期に来日したニューカマーの既存の研究としては、民族別、国籍別、国内での滞在資格別、居住地域別といった形でフィールドワークや調査が多く行われているが、アフリカ出身者を対象にした研究はごく限られており、和崎のカメルーン人研究、川田のナイジェリア人研究、若林のガーナ人研究しかなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、統計資料や調査、フィールドワークから、日本に暮らすアフリカの人たちの生活を健康という切り口で描くことである。

3. 研究の方法

(1) 統計資料の整理と分析

関連の統計や資料、文献から得られる情報を整理する。在留外国人統計などの在留関係の統計や、特別集計として国籍別データを公表している政府統計について、集計の特徴と偏りに留意しつつ、経年データを整理し加工をして、動向と特徴を把握する。

(2) 調査、フィールドワーク

宗教別や民族別のコミュニティ、集会、冠婚葬祭の場や、アフリカ出身者集住地域などでのフィールドワーク。本人およびキーパーソンや配偶者へのヒアリング、面接調査等。

(3) 対象地域について

本稿では、アフリカ人、アフリカ移民という言葉を用いたが、本調査の対象者は、主にはガーナ共和国出身者、その他ナイジェリアやセネガルなどの西アフリカ地域出身者である。現在アフリカからのニューカマーのうち、最も人口が多いのはナイジェリア出身者であり、セネガルやカメルーンなど西アフリ

カを中心に多様な国の出身者がいる。それぞれの文化や意識、来日経緯や母国の社会背景、滞日生活背景には異なる点が多く、本来は個別に検討すべきである。しかし日本国内での動向やコミュニティでは必ずしも区別しきれない面もあるため、本研究段階ではまずはアフリカ人という記載とした。

4. 研究成果

(1) 基本的属性

在留外国人統計に登録されているデータでみると、現在日本に在留するアフリカ国籍の人口は12000人弱であり、ナイジェリアが最も多く約2500人、次いでガーナが2000人弱であり(2013年末現在)、超過滞在などの人も含めるとより多いと推測される。日本での生活が長期化・安定化するなかで日本に帰化して日本国籍をとった人もいる。

年齢層は、来日が急増した時期には20-30歳代の青年層の男性が中心であったが、滞在が長期化し、現在では中高年齢層にも分布が拡大している。

今後の動向は日本側の外交政策、入国管理政策によって左右されるところも大きい。家族の呼び寄せなど、日本で生活するアフリカ人は多様化するものと思われた。しかし査証取得の困難さなどから新規の来日は難しくなっており、年齢構成は全体には高齢化していくと思われる。また中国などアジアとアフリカとの交流が活発化するなかで、日本に来る人々の特徴や来日目的も変化していくものと思われた。

(2) 健康と生活

彼らの健康問題を身体面、精神面、社会面から検討した。身体的な健康問題としては、日本に暮らすアフリカ人は、食生活や居住環境などの基本的なライフスタイルの変化や、気候の違いによる体調不良、言語や習慣の異なる場での労働災害、自然災害への巻き込まれなどにより、健康問題を発生させやすい。近年では加齢に伴う愁訴や、高血圧、心疾患など生活習慣病の罹患も生じている。これら身体的な健康問題のリスクが高まる背景には、保健医療情報の入手困難さ、外国人を対象とした医療体制の不備など、日本の外国人対象の対応の不十分さがある。

精神的な健康については、日本社会への不適應、日常の地域生活や人間関係でのトラブル、将来生活への不安などから、異文化ストレスや日本社会への不適應を起し、精神健康上の問題を生じさせる人もいる。不安定な雇用環境にある人は、失業、過労、雇用条件など就労面でのトラブルに起因するストレスも大きい。とくにアフリカ人の場合は、アフリカ文化に対する日本人の無知や偏見、日本社会の否定的な反応がストレスの原因となる面もある。アジア系外国人と違い、日々の地域生活で外見から常に外国人と認識され

るため、ストレスも生じやすい。ただし、これら日本人の偏見は、東京など都市部では90年代頃に比べると軽減されたという意見や、恐らく地域差が大きいであろうという意見もみられた。

さらに、日本での生活のみならず、帰国後の生活不安や母国家族との関係が精神的な負担となっている場合もある。将来は帰国したいという意向がある人は多いが、母国に仕事や家、生活の場が確保されている訳でもない。母国でのヒアリングでは、帰国したものの長らく離れていた母国社会に不適應を起こしたという人もいた。日本人配偶者や子が日本で生活し続けるなか、単身で帰国するという選択もしにくく、老後の生活の場に不安をもつ人も少なくない。

社会的な健康については、WHOの健康の定義（健康は身体的、精神的のみならず社会的にも良好な状態をいう）においても、ICF国際生活機能分類（心身機能、活動、参加の3側面から人の生活機能を捉えるが、同じ健康状態でも個人因子と環境因子により相違が生じるという考え方）においても、心身面だけでなく社会生活面から捉える必要性が指摘されている。社会生活については、かつては「社会的不利」といった社会参加が阻害される側面への着眼、マイナス面への着眼が主であったが、ICFでは社会参加の側面、プラス面を評価することが重視されている。日本に生活する外国人の生活や健康についてこの視点は参考になる。彼らの健康は、身体面からのみでなく、人間関係や、社会活動、労働、経済、社会的地位などの社会的側面からみることができ、社会的不利の点と共にとどのような社会参加がなされているかという点に着眼することで、より理解できることは多い。

(3)健康問題への対処

疾病など身体的な健康問題によって医療が必要になった外国人へのケア体制は、日本では十分には整備されていない。アフリカ特有の疾患、日本人とは異なる体質や器質によって生じる疾患もあるが、それらを的確に診断、治療できる医療機関、医療者は限られている。アフリカでは一般的な疾患であっても、日本の病院や診療所では診断、治療に至らない場合もある。さらに、彼らの文化や宗教、生活背景などに配慮して対処できる医療者は多くない。今後高齢化するなかで、介護や保健福祉領域といった生活支援領域のニーズが増える際、彼らの生活や文化を理解することが求められている。

精神的な健康上の問題への対処行動としては、アフリカ人の場合には同国人や宗教ごとのサポートティブネットワークも機能している。地域の公民館などを借りて定期的に集会を開き続けているグループもある。ガーナ人の場合には民族別のネットワークは聞かれないが、ナイジェリア人では民族別のネッ

トワークが機能している。イスラム教やキリスト教など宗教活動を行うための定期的な集まりや冠婚葬祭は活発で、母国で亡くなった家族の葬儀を日本で行う場合もある。また、かつてほど活発ではないというが、友人との頻繁な電話でのやりとり、仕事終わりや休日にターミナル駅近辺などに集まって話をするなど、母国でよくあるコミュニケーション方法は日本でも行われており、情報交換の場としてだけでなく、ストレス対処、メンタルヘルス維持の機能も果たしている。

アフリカ人は言語の習得能力が高く、比較的短期間に日本語を習得している人が多いともいわれる。この言語能力やコミュニケーション能力の高さは、職場や地域で日本人と良好な関係を形成して、サポートティブな関係を形成している。このことは、精神健康の維持やストレス対処としても機能しているものと思われる。来日後の早い段階で日本人と友人関係や恋愛関係を形成したり結婚したりしている人が多いのは、彼らの言語能力やコミュニケーション能力の高さによる結果という面もあるのかもしれない。

健康問題への対処を考えるうえで、保健医療福祉サービスに対する考え方や期待の日本人との違いについては抑えておく必要がある。日本人が医療や医療者に期待する役割と、彼らが期待する役割には違いがあり、この違いは臨床で問題を発生させやすい。母国の民間薬や伝統的な療法を利用している人もいる。西洋医学中心の日本の医療も利用するが、併用して母国の薬や伝統療法を利用しているもいる。これらは日々の健康維持に重要な役割を果たしている。日本に暮らす人たちが高齢化し、ケアに関わる日本人も増えるなか、彼らの健康関連の伝統文化や療法を理解することは大切である。

重大感染症への対処も大切である。エイズやエボラ出血熱などアフリカ地域で感染症が流行すると、日本に暮らす彼らにも影響が及んでいた。たとえば、母国に一時帰国した人が再来日した際、発熱していたためにエボラ出血熱を疑われ、複数の医療機関で受け入れを拒否されたという事例がある。HIV/AIDSの拡大が日本のメディアでも多く報道された頃には、同僚の日本人たちから拒否されたという事例もあった。これら事例にみるように、出身地域で生じた健康問題、とくに重大感染症のような健康問題が生じた際には、日本に生活する外国人にも影響が及んでおり、医療機関や専門職の対策と一般市民レベルでの対策の両面から、慎重に対応できる準備や能力が必要と考えられた。

(4)今後の課題

初期に来日したアフリカ人1世は既に中年に至っており、今後は退職や高齢化により生じる生活問題や健康問題が増える。健康関係の事象については、身体的面や疾病だけを見るのではなく、日本での生活背景も含めて

理解を深めることが大切である。彼らの日本での生活には、問題や困難と同時に、喜び、楽しみ、人間関係や生活の充実、社会的地位の向上、新たな家庭の経営といったプラス面も多く含んで構成されている。解決されるべき問題の整理と共に、生活を豊かにしているものへ着眼も大切である。日本を生き抜く彼らの生活力の高さや生活戦略に視点をあてることで、日本人や日本社会がアフリカの人々や社会から学ぶべき示唆が得られると思われた。

二世、三世が誕生していることから、家族、世帯の変容への着眼も大切である。大部分の二世、三世は日本国籍をもつ日本人である。それぞれが生活の場をアフリカと日本、さらに欧米やアジアなど第三国へと広げており、日本との関係やネットワークもグローバルな広がりを見せている。

アフリカに接した日本人側の研究も大切な課題である。一般の日本人がアフリカ人と地域生活を共にした経験はかつてなく、直接アフリカ人と接点をもった日本人がどのような行動をとってきたのか、どのような意識変容があったのかについて記録、検討したい。地域住民、職場の同僚、学校関係者など、彼らと生活の場を共にした日本人は何を感じたのか、何を学んだのかを明らかにする調査研究は、アフリカという異文化に接した日本研究として意味がある。さらに、日本人配偶者や子、孫、家族や親族の意識や行動の変化は、職場や地域を共にした人とはまた異なる面もある。配偶者や子には、夫の母国へ移住した人もおり、両国で生活した彼女らや子どもらの経験に学ぶことは多い。これら情報を整理することも今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

若林チヒロ. 結婚、移住してガーナを生きる日本の女性たち. 地域研究. 2009;9:298-315.

〔図書〕(計 1 件)

若林チヒロ. 日本に暮らすガーナ人-移民と日本人家族の生活. 高根務, 山田肖子編. ガーナを知るための47章. 東京: 明石書店. 2011; 27-31.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

若林 チヒロ (WAKABAYASHI, Chihiro)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号: 40315718